親子葛藤に関する青年前期の子どもと親の社会的推論

内海 緒香¹ お茶の水女子大学

Social reasoning of early adolescents and parents regarding parent-child conflicts

Shoka Utsumi (Ochanomizu University)

Few researches have delineated how adolescents and parents view conflict in familial settings in Japan. Seventh and eighth grade junior high school students ($n = 63$) and parents ($n = 68$) were asked to complete a questionnaire using four hypothetical stories to investigate their judgments and reasoning about parent-child situations. Vignettes described health management, household chores, and two situations involving personal choice (clothes and friends) situations. Participants responded differently to personal, prudential, and conventional conflict. Parental acceptance of the child's demands and discretion and the child's tendency to reject parental authority were significantly higher for personal than for conventional or prudential conflict, and for conventional than for prudential conflict. Children rejected parental authority more than adults rejected parental authority when the child's choice was central to the child's identity; on the other hand, children accepted parents' conventional demands more often than adults accepted parents' conventional demands. These results suggest that early adolescents assert their rights when they judge the situation to be in the personal domain.

Key words: social domain theory, parent-child conflict, prudential domain, personal domain, conventional domain.

The Japanese Journal of Psychology

2015, Vol. 86, No. 3, pp. 230-239

J-STAGE Advanced published date: May 28, 2015, doi.org/10.4992/jjpsy.86.14011

思春期の子どもを持つ家庭では、多少なりとも親子間の諍いや口論を経験するようになる (Laursen, Coy, & Collins, 1998)。しかし、親子葛藤は必ずしも青年期の親子関係の病理性を示しているとは限らない。社会化を複数の主体の相互作用とみる研究者たちは、子どもが親の要求を受け入れる場合だけではなく親の要求の拒否や不服従を取り上げ、その発達の意味を探究してきた (Smetana, 1991; Smetana & Asquith, 1994)。

社会的領域理論 (social domain theory) は、社会的な認知の発達に伴い子どもが文脈や状況に応じて、異なった種類の社会的理解、推論や判断をどのように適用し調和させていくか調べる実証的アプローチ (Nucci,

1981; Turiel, 1978) である。この理論は、Turiel (1978) の道徳性の発達研究により定式化された。その後、道徳性に限らず、子どもの社会的認知発達を扱うさまざまな研究領域へ発展した。主要な社会的領域として、道徳領域 (moral domain)、慣習領域 (conventional domain)、自己管理領域 (prudential domain)、個人領域 (personal domain) があげられる。これらの領域は環境と子どもとの相互交渉から得られた経験により幼児期早期から区別されると考えられている。道徳領域は所有物を奪う、身体を傷つけるなど他者の福利や権利の侵害に関わる問題への知識が含まれ、普遍的性質を持つとみなされる領域である。慣習領域は社会の中の権威、伝統、社会的規範についての知識が含まれる。道徳領域とは異なり規則の有無や文脈の違いが反映されることから、大人が定めたルールには恣意性があると認識される。一方、自己管理領域と個人領域には、自己と他者を心理的システムとみなす、“ひと”に関する知識や理解が含まれる (Smetana, 2010)。個人領域とは自己やアイデンティティ、個人的好み、主体としての行動の原因や帰属の理解に関する領域であり、個

Correspondence concerning this article should be sent to: Shoka Utsumi, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University, Ohtsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610, Japan (e-mail: sutsumi@hotmail.co.jp)

¹ 論文作成にあたりご指導をいただきました先生方、調査実施に協力してくださいました先生方、保護者様と中学生の皆様へ深く感謝申し上げます。

人的な性質を持つ物事に関するコントロールを主張する際に用いられる (Nucci, 1981)。健康や安全、快適さに関する知識を含む問題も熟慮を求められる自己管理領域として他の領域とは区別される。自己管理領域は、元来、道德領域との対比により命名された (Tisak & Turiel, 1984)。同じように否定的な結果を招く行為であっても、他者に危害を与える行動は道德領域の問題であると認識され、自分に危害が及ぶ、あるいは及ぶ可能性のある活動に従事することは自己管理領域の問題として識別される。

青年期の親子葛藤に対する親子の判断

青年期には子どもの社会化を念頭に置いた親の要求と、アイデンティティ獲得 (Erikson, 1968) に向け自律性を主張し始めた子どもの要求との対立が生じる。葛藤が増加する理由の一つとして、青年期にはいると子どもが親子葛藤の原因や帰結について親とは異なった推論を行うようになる (Smetana, 1991) ことが考えられる。社会的領域理論は、多様な日常場面における親子の判断の違いに着目し、この時期の親子間葛藤の性質を明らかにしてきた (Smetana & Asquith, 1994)。ヨーロッパ系アメリカ人家庭を主な研究対象とした Smetana (2010) によれば、日常的な親子葛藤が生じる頻度の高い領域は、慣習、自己管理、および個人の3領域であり、道德領域に関する割合は最も少なかった。親子葛藤に対する子ども側の認識は、自室の掃除・手伝いを行うタイミング、および就寝時間における自己決定権の主張や、アクセサリなどの装飾品や衣服に対する個人的選好のような個人領域の理由を用いた正当化が大半を占め、慣習領域や自己管理領域による正当化は相対的に少なかった。個人の主体性に関わる自己決定の感覚や自分のアイデンティティや所属を表現する手段となる個人的な選択権は、ともに青年期の発達に重要な側面であると考えられる。個人領域に関する認識が発達してくると、子どもは、親には関係が無いと判断したことや親の考えに反するようなことは敢えて話さないなどプライベートな線引き (Marshall, Tilton-Weaver, & Bosdet, 2005) や、積極的な情報管理 (Smetana & Metzger, 2008) を行うようになる。例えば、友人との電話を通じた会話やメールのやりとり、日記の内容など、親が無理に知ろうとすれば子どもの怒りや反発を招くことは容易に想像できよう。

一方、親子葛藤についての親側の報告では、社会的慣習による正当化が半数を占め、次に、自己管理領域による正当化が多かった (Smetana, 2010) 社会的慣習による正当化には、社会的序列、権威、社会的協調、社会的規範に子どもが従わない場合への懸念や、礼儀正しさの必要性への言及が含まれていた。親が社会的慣習の重要性を強調する背景には、子どもが家族や社会の基準に適合した行動を取ることを望む親の意図が

反映されており、自己管理領域に関する正当化には、子どもの健康を守り安全な生活を送ってほしいとの親の強い関心が反映されていると考えられる。子どもの個人領域による正当化の主張に対して、親は、子どもの自律性の発達を重視してはいるが、不適応に陥るリスクを回避させ、社会的規範に従うことの大切さや、場合によっては他者の気持ちを思いやる気持ちを育てることも重要だと多面的に考える。たとえば、子どもが、友人との付き合いを自分の選択の自由、すなわち個人領域の問題だと判断するのに対し、親は、親の目の届かない場所での友人関係は、自己管理領域の側面とみなす傾向があった (Smetana, Crean, & Campione-Barr, 2005)。

個人領域の重要性

社会的領域理論によれば、複数の社会的領域における問題の違いを知ることは文化を超えてその社会集団で適応的に生きるために必要であり、中でも個人領域における認識の発達は自己発達や対人関係で健全な交渉能力を育むうえで特に重要である (Nucci, 1996)。個人領域の認識が発達すると、子どもは個人的表現や選択についての自己の正当性を訴えるようになる。たとえば、ヨーロッパ系アメリカ人の青年は全般的に親子葛藤の性質について他者の福利に反する問題や決められた規範や規則の遵守の問題ではなく、自分が決めるべき個人の問題であると主張していた (Smetana, 2010)。アメリカ国内の異なった民族の間でも親子葛藤や親子協調の様相には大きな違いがみられず、青年たちは衣服、食べ物、友人の選択は、個人の好みの問題であると考えていた (Fuligni, Hughes, & Way, 2009)。また、四半世紀前の時点では、香港の中国人青年は個人主義をあまり重要視しない (Feldman, Rosenthal, Mont-Reynaud, Leung, & Lau, 1991) と述べられていたものの、近年香港や中国本土の青年たちも親子間葛藤の理由や正当化について個人の権利や好みを優先することが報告されている (Yau & Smetana, 2003)。このように、洋の東西を問わず青年は個人領域の問題と他の社会的領域の問題とを区別しており、かつ個人領域が守られる重要性を認識していることが明らかになってきている。本邦では、複数の社会的領域における社会的判断の弁別性を問題とし、子どもの視点から捉えた個人領域の重要性を明らかにした研究はほとんどないが、数少ない研究の一つとして Yamada (2009) の研究があげられる。

児童を対象とした先行研究と本研究の目的

Yamada (2009) は、日本の小学生を対象に面接調査を行い、道徳的、慣習的、個人領域を反映した仮説的な親子間葛藤の問題について、両者のうちどちらの要求が認められ、どちらが決定すべきであり、物語の

中の子どもは親の権威に従うべきか質問した。その結果、小学生は物語の中の親子間葛藤が親の道徳的懸念を反映していると判断した場合には親の権威を認めていた。しかし、葛藤の性質が子どもの個人的要求に対する親からの妨害と捉えられた場合には、ほとんどの小学生は親の権威を否定し子ども自身が決めるべき問題であると主張した。慣習領域の問題では、個人領域ほどではないが、親の権威を否定した小学生は半数以上を占めていた。これらの結果から、学童期の子どもは個人領域とその他の領域との区別を行っていることが示された。

Yamada (2009) の研究は、児童期の親子葛藤を扱っていたものの子どもの報告のみを使用し、子どもの判断と親の判断と対比させていなかった。Smetana (2010) の研究が指摘したように親側の判断には子どもの判断と異なる特徴があると考えられ、子ども側についても児童期と青年期とでは回答傾向に違いがみられると予測される。また、購入する子どもの靴の色の選択場面が描かれた個人領域のビネット内容には選択の持つ意味についての情報は加えられていなかった。心理的本質主義 (psychological essentialism: Gelman, 2004) の考えによれば、幼児は大人と同様に観察不可能な安定した本質的属性に着目しながら生物的概念を発達させる。ビネット法を用いた領域理論に関する最近の研究において、類似した2種類の個人的選択場面を提示された児童期の子どもは、物語中の登場人物はアイデンティティの感覚を伴わない周辺的な活動よりも、アイデンティティの感覚を伴った本質的な活動への制限のほうが、主体性を損なうものとしてより強い不快感を示すだろうと推論した (Lagattuta, Nucci, & Bosacki, 2010)。したがって、青年期の子どもが行う選択について物語の性質が個人領域に属すると判断されるには、アイデンティティの問題を反映した情報が必要と考えられる。本研究では、親子両方の報告を扱うとともに、本質的な情報を加味した物語場面を2種類考案した。一つは、衣服を購入する際の好みと親と相反する状況である。自らの選択が子ども自身のアイデンティティの感覚を高めることを明確にするため、将来の職業選択の可能性に触れたエピソードを加えた。もう一つは、友人との付き合いに関する状況である。青年期の発達課題であるアイデンティティ形成を完成させる前に、仲間と交わることによる集団的アイデンティティ形成が必要となるため、青年前期には自己発達における仲間関係の重要性が著しく増す (Newman & Newman, 2001)。個人領域の制限の中でもとりわけ青年前期のアイデンティティ形成に重要な本質的活動を禁じる制限は、他の規則よりも親の規制に屈しないものとして扱われると考えられる。したがって、青年前期の子どもは、将来の職業に関連する選択に対する親からの制限に比べ、友人の選択に対する制限を否定

的に捉え、子どもが否定的に受け止める程度は親よりも強いと予想される。次に、本研究では、Yamada (2009) では検討されていなかった自己管理領域の問題として、子どもの健康を損ねるような場面を設定した。青年期の自己管理領域の問題は、典型的には、喫煙や飲酒、非法薬物の摂取などがテーマとして用いられる (Smetana et al., 2005)。しかし、これらの行動は健康を損ねるというより、慣習違反や道徳に反する問題として解釈される恐れがあることから、日常的な食行動に関連したリスク行動を取り上げた。さらに、個人領域や自己管理領域の問題と比較するため、慣習領域に相当する条件も加えた。慣習領域の問題として、Yamada (2009) で扱われた子どものTV視聴の要求と親からの手伝いの要求との葛藤状況を使用した。

社会的領域理論の分野では、我が国には幼児期における道徳領域と慣習領域の区別を確認した先駆的研究 (首藤, 1988; 首藤・岡島, 1986) がある。他に、保育や学校場面を扱った研究 (越中, 2007; 松永・高橋・峯岸, 2007) は近年行われているものの、家庭場面における個人領域、自己管理領域、慣習領域に関する青年期の子どもの判断を調べた研究や、これらの領域における親子の認識の違いを調べた研究はまだ行われていない。本研究の目的は、家庭内で日常的に生じる親子葛藤の問題の性質が、個人領域、自己管理領域、慣習領域として弁別されているか吟味するとともに、青年前期の親子が判断する理由を比較しその特徴を調べるものである。これまで述べた先行研究の知見から以下の通り物語に関する仮説を立てた。(a) 三つの社会的領域が区別される。すなわち、衣服や友人の選択における親子葛藤は個人領域の正当化、子どもの健康に関わる親子葛藤は自己管理領域に属する正当化、家の手伝いは慣習領域に属する正当化が最も多く行われる。(b) 要求の正当性について三つの社会的領域間で異なった判断が行われる。(c) アイデンティティを反映した物語では、中学生は保護者よりも、特に友人選択条件において子どもの権利を主張する。(d) 友人選択条件では、保護者は中学生より自己管理領域の判断を使用する。

方 法

調査方法と対象者

北海道の大都市近郊と中部地方の中都市にある公立中学校2校に調査協力を要請し承諾を得た。方法はビネットを用いた匿名による自記式質問紙調査である。学校側には学校集会の場を利用した実施と、クラスを通じた家庭向けの質問紙配布の2種類の方法を依頼した。記入にあたり親と子どもが相談しないよう教示してもらい、プライバシーの観点から中学生と保護者の質問紙は別々の封筒に入れ回収された。学校集会で配

Table 1
親子間葛藤場面を記述した物語の内容

場面	内容
衣服の選択	K (君・さん) は洋服にとっても興味が有り, 将来はファッション関係の仕事がしたいと考えているほどです。お母さんやお父さんと一緒に洋服を買いに出かけたところ, お母さんやお父さんが良いと選んだ洋服は K (君・さん) の好みに合いませんでした。K (君・さん) は自分の選んだ洋服を着たいが, お母さんやお父さんは別の服が良いと思っています。ただし, 洋服の値段は同じぐらいです。
友人の選択	O (君・さん) には最近新しい友人が出来ました。その友人とはとても気が合い, 一緒にいると楽しくてしかたがありません。ところが, お父さんやお母さんはその友人をあまり気に入っていません。O (君・さん) は, その友人と遊びたいが, お父さんやお母さんは遊んでほしくないのです。
健康管理	身長 160 cm, 体重 55 kg の T (君・さん) はほとんど食事を取らなかったためこの 1 ヶ月で 45 kg に体重が減りました。T (君・さん) は体調が悪くなり元気がありません。 T (君・さん) は体重が増えるのが嫌で食べたくありませんが, お母さんやお父さんはきちんとご飯を食べしてほしいと思っています。
手伝い	M (君・さん) は, 夢中になってテレビ番組を見ています。ところが, お父さんやお母さんは夕食の手伝いをするようにと言ってきました。M (君・さん) はテレビ番組を最後まで見終えたいが, お父さんやお母さんはお手伝いをしてほしいと思っているのです。

布された質問紙への回答者と家庭向けに配布された質問紙への回答者は重複していなかった。郵送回収は 47 家庭 (回収率 16%) であった。分析対象者は中学生の子ども 63 名 (女子 67% : 1 年生 13%, 2 年生 87%) と中学 1 年生と 2 年生の子どもを持つ保護者 68 名 (母親 94% : 母親 $M = 43.13$, $SD = 4.81$, 父親 $M = 44.67$, $SD = 3.51$) であった。

調査時期

調査期間は 2010 年 12 月から 2011 年 12 月までの 1 年間である。

調査内容

ビネットの内容 Yamada (2009) の面接に用いた説明文を参考に三つの社会的領域に関する物語を作成した²。Yamada (2009) の面接では, 対象者に口頭での説明とともに絵カードを呈示したが, 本研究では, 親子間で日常的に生じる葛藤場面を記述したビネットを使用した (Table 1)。質問紙には, 個人領域, 自己管理領域, 慣習領域の順番で物語を配置した。物語の登場人物である“子ども”には男女両方の呼称を記し, 中学生には自分と同じ性別と年齢, 保護者には対象となる自分の子どもと同じ性別と年齢だと仮定して判断するよう求めた。物語の中の“親”について父親・母親どちらとも解釈できるよう両方記載した。個人領域に相当する物語のうち一つは, 衣服の購入に際して親子間で衣服の好みが発生する場面を描写した。二つ目の友人の選択を扱った物語では, 気の合う新しい友人との付き合いに関して, 親の要求と子どもの要求が衝突する場面を描写した。自己管理領域に相当する健康

管理を扱った物語では, 子どもの自発的食事制限と親の子どもに対する健康管理の要求とが衝突する場面を描写し, 単なる食欲不振と混同されないために, 体重減少の情報を付記した。慣習領域に相当する物語では, テレビ番組視聴に関する子どもの要求と夕食の手伝いに関する親の要求とが衝突する場面を描写した。

ビネットの回答方法と配点 調査参加者は, それぞれの物語を読んだ後に, 要求許容性, 決定者, 親の権威の三つの質問に回答した。Yamada (2009) の設問方法に従い, 要求許容性の判断“許せると感じるのはどちらの希望ですか”と決定者の判断“誰が決めるべきだと思いますか”について, “子ども・両方・親”の選択肢を設け³, 得点は 1 点・2 点・3 点とした。親の権威の判断“子どもはお父さんやお母さんに従わなければならないですか”について, “はい・場合による・いいえ”の選択肢を設け, 得点は 3 点・2 点・1 点とした。回答後“なぜそのように思うのですか”の教示に従い正当化する理由を自由に記述してもらった。得点が高いほうが親の要求・決定・権威を認めることを示す。

正当化についてのコーディングカテゴリー 3 種類の質問 (要求許容性・決定者・親の権威) に関する, 正当化についての自由記述を, 先行研究 (Smetana, 1989; Smetana, Tasopoulos-Chan, Gettman, Villalobos, Campione-Barr, & Metzger, 2009; Yamada, 2009) を参考に作成した, コーディングシステムの定義に基づき分類した⁴ (付録)。コーディング作業は, 仮説について

² 学校集会の場を利用した質問紙調査実施の後, 回答者に面接を行い物語内容に不自然な点は無いことを確認している。

³ 決定者の判断では, 判断の方向を連続的に捉え, “分からない”という回答を出さないための工夫として“両方”の選択肢を設けた。

⁴ 自由回答全 1,572 のうち, 欠損値 (18%) を除いた 1,289 コードを分析に使用した。

知らされていない、心理学の研究に携わる大学院生 2 名が担当した。分析には、17 の下位カテゴリーをまとめた 8 種類の大カテゴリー（道徳的・慣習的・自己管理・実用的・個人的・心理的・協調的・その他）を使用した。公正さや他者の福利、互恵性に関する判断は“道徳的判断”、地位や権威、規則や制裁などについての判断は“慣習的判断”とした。“自己管理的判断”は、その人自身の健康や安全に関わる判断、“実用的判断”は、経済的側面についての言及や工夫を行うことで問題を解決しようとする判断を含んでいる。“個人的判断”は、その人の要求充足や好みの優先性、意思決定の主体性、意思表明の重要性を強調する判断を含んでいる。“心理的判断”は、その人の性格特徴や心理的発達に関する判断を含む。“協調的判断”は、他者の要求、感情、立場、視点などを理解する必要があることに言及する、あるいは、対人関係の重要性を強調する判断を含む。“その他”には、上記のいずれのカテゴリーにも分類できない言明、または分類するには短すぎる言明が含まれる。

分析方法

データの分析には、統計ソフト IBM SPSS Statistics 20 を用いた。まず、コーディング分類を行い 4 種類の物語場面について報告者ごと正当化カテゴリーの頻度を集計した。次に、サンプルの偏りから生じる影響を吟味するため、調査を実施した中学校の所在する 2 都市と保護者と中学生の性別についてそれぞれの判断ごとに回帰直線の平行性の検定と有意性の検定を行ったところ、都市のみが平行性と有意性をともに満たしていた。そこで、要求許容性・決定者・親の権威の判断それぞれについて都市を共変量、場面 4（衣服 / 友人 / 健康管理 / 手伝い）と報告者 2（保護者 / 中学生）の 2 要因（参加者内参加者間）共分散分析を行った⁵。多重比較は Bonferroni 法を用いた。仮説の性質から、物語の主効果、および物語と報告者の交互作用を問題とし、交互作用が有意であった場合は、物語場面ごとの報告者の判断の違いを吟味することとした。

倫理的配慮

本研究は、事前にお茶の水女子大学研究倫理委員会の認定を受けたうえで調査を実施した。実施手順はその規定に沿ったものである。

結 果

ビネット内の登場人物は“親、子ども”、分析対象

の報告者は“保護者、中学生”と記す。

物語に対する正当化

物語ごとに正当化の判断カテゴリーについて、2 者間のカッパ係数 (Cohen, 1960) を算出したところ、衣服の選択場面 (.93 — .87)、友人の選択場面 (.91 — .87)、健康管理場面 (.87 — .79)、手伝い場面 (.79 — .75) と、満足できる一致率 0.75 (Fleiss, Cohen, & Everitt, 1969) を全て上回っていた。

まず、物語ごとに報告者と正当化の判断カテゴリーによるクロス表を作成した (Table 2)。各場面の全体的特徴について述べると、衣服の選択場面において報告者全体で最も多く使用された正当化理由は、個人的 (57%) であり、次は協調的 (16%) であった。友人の選択場面で最も多く用いられた判断は、個人的 (42%)、次は協調的 (19%) であった。健康管理の場面で最も多く用いられた判断は、自己管理 (39%) であり、次は協調的理由 (20%) であった。手伝いの場面で最も多く用いられた判断は、慣習的 (30%) であり、次は協調的 (23%) であった。

引き続き、報告者により判断カテゴリーの選択の違いに差があるかどうか調べるためフィッシャーの直接確率を求めたところ、4 種類の物語それぞれ全て 1% 未満の有意な偏りがみられた。残差分析を行った結果、衣服選択場面において中学生は保護者よりも個人的 ($p < .05$) 理由を、保護者は中学生よりも実用的 ($p < .05$) 理由を多く使用していた。友人の選択場面において中学生は保護者よりも個人的理由 ($p < .01$) を、保護者は中学生よりも慣習的 ($p < .05$)、自己管理 ($p < .01$)、実用的 ($p < .05$)、協調的 ($p < .05$) な理由を多く使用していた。健康管理場面において中学生は保護者よりも実用的 ($p < .05$)、個人的 ($p < .01$) 理由を、保護者は中学生より慣習的 ($p < .01$) 理由を多く使用していた。手伝い場面において中学生は保護者より道徳的 ($p < .01$)、実用的 ($p < .01$) 理由を、保護者は中学生より心理的 ($p < .05$) 理由を多く使用していた。全ての場面で同じカテゴリーの理由を用いた回答者は全体の 2% (保護者 3 名、中学生 4 名) であった。

三つの判断における物語と報告者の効果

衣服の選択と友人の選択場面では個人的理由、健康管理場面では自己管理、手伝い場面では慣習領域の判断カテゴリーによる正当化が最も多かったことから、以降の分析では各物語場面を個人領域衣服選択条件、個人領域友人選択条件、自己管理領域、慣習領域と呼ぶこととする。共分散分析の結果、得られた推定周辺平均値と標準誤差を Table 3 に示す。

要求許容性 物語の主効果 ($F(3, 384) = 26.9, p < .01, \eta^2 = .17$) と物語 × 報告者の交互作用 ($F(3, 384) = 15.99, p < .01, \eta^2 = .11$) が有意であった。多重

⁵ 分析に使用した変数の欠損値は 5% 以下であった。欠損した変数による他の変数の回答パターンに大きな問題が見当たらなかったため、Expectation Maximization (期待値最大化) アルゴリズムによる推定で処理した。

Table 2
物語と報告者による判断カテゴリーの頻度

場面	報告者	判断カテゴリー 度数 (%)							
		道徳的	慣習的	自己管理	実用的	個人的	心理的	協調的	その他
衣服の選択	中学生	1 (1)	20 (11)	0 (0)	6 (3)	111 (63)	0 (0)	22 (13)	16 (9)
	保護者	0 (0)	25 (15)	2 (1)	17 (10)	83 (50)	2 (1)	32 (19)	6 (4)
	合計	1 (0)	45 (13)	2 (1)	23 (7)	194 (57)	2 (1)	54 (16)	22 (8)
友人の選択	中学生	0 (0)	14 (9)	14 (9)	0 (0)	98 (60)	1 (1)	23 (14)	14 (9)
	保護者	2 (1)	27 (18)	28 (19)	4 (3)	34 (23)	5 (3)	36 (24)	12 (8)
	合計	2 (1)	41 (13)	42 (13)	4 (1)	132 (42)	6 (2)	59 (19)	26 (8)
健康管理	中学生	6 (4)	14 (9)	60 (38)	4 (3)	23 (15)	3 (2)	35 (22)	13 (8)
	保護者	1 (1)	37 (23)	65 (41)	0 (0)	9 (6)	4 (3)	28 (18)	15 (9)
	合計	7 (2)	51 (16)	125 (39)	4 (1)	32 (10)	7 (2)	63 (20)	28 (9)
手伝い	中学生	10 (6)	41 (26)	0 (0)	16 (10)	24 (15)	6 (4)	33 (21)	25 (16)
	保護者	1 (1)	48 (35)	0 (0)	4 (3)	17 (12)	16 (12)	35 (25)	17 (12)
	合計	11 (4)	89 (30)	0 (0)	20 (7)	41 (14)	22 (8)	68 (23)	42 (14)

Table 3
三つの判断における物語の主効果と物語と報告者の交互作用

	要求許容性	決定者	親の権威
個人 (衣服)	1.51 ^a (.05)	1.35 ^a (.05)	1.78 ^a (.05)
	1.36 (.07) / 1.65 (.07)	1.27 (.07) / 1.42 (.06)	1.69 (.07) / 1.88 (.07)
個人 (友人)	1.56 ^a (.05)	1.28 ^a (.04)	1.75 ^a (.05)
	1.27 (.07) / 1.85 (.07)	1.19 (.06) / 1.37 (.06)	1.53 (.07) / 1.98 (.06)
自己管理	2.76 ^b (.04)	2.21 ^b (.07)	2.54 ^b (.05)
	2.78 (.06) / 2.73 (.06)	2.15 (.09) / 2.28 (.09)	2.43 (.08) / 2.64 (.07)
慣習	2.39 ^c (.06)	1.96 ^c (.06)	2.23 ^c (.05)
	2.54 (.08) / 2.23 (.08)	1.98 (.09) / 1.94 (.09)	2.29 (.08) / 2.18 (.07)

注) 上段は報告者全体, 下段は報告者ごと (左は中学生, 右は保護者) の推定周辺平均である。

() 内は標準誤差である。異なったアルファベット (a,b,c) の物語間, 太字の報告者間に有意差がみられた。

比較の結果, 個人領域衣服条件と個人領域友人条件では有意差はみられず, 個人領域衣服条件と自己管理領域, 個人領域衣服条件と慣習領域, 個人領域友人条件と自己管理領域, 個人領域友人条件と慣習領域, 自己管理領域と慣習領域の間に全て 1%水準で有意差がみられた。子どもの要求に関する許容性は, 個人領域の2条件, 慣習領域, 自己管理領域の順で高かった。交互作用の単純主効果の検定では, 個人領域衣服選択条件 ($F(1, 128) = 8.00, p < .01, \eta^2 = .06$), 個人領域友人選択条件 ($F(1, 128) = 32.98, p < .01, \eta^2 = .21$), 慣習領域 ($F(1, 128) = 7.44, p < .01, \eta^2 = .06$) において有意差がみられた。二つの個人領域では中学生のほうが保護者よりも子どもの要求に関する許容性が高く, 慣習領域では中学生のほうが保護者よりも親の要求に関する許容性が高かった。

決定者 物語の主効果 ($F(2.78, 355.65) = 9.97, p$

$< .01, \eta^2 = .07$) が有意であった。多重比較の結果, 個人領域衣服条件と個人領域友人条件では有意差はみられず, 個人領域衣服条件と自己管理領域, 個人領域衣服条件と慣習領域, 個人領域友人条件と自己管理領域, 個人領域友人条件と慣習領域, 自己管理領域と慣習領域の間に全て 1%水準で有意差がみられた。子どもが決定者とする判断は, 個人領域の2条件, 慣習領域, 自己管理領域の順で高かった。個人的, 慣習的, 自己管理の順で高かった。物語×報告者の交互作用の効果は有意ではなかった。

親の権威 物語の主効果 ($F(2.82, 360.86) = 7.16, p < .01, \eta^2 = .05$) と物語×報告者の交互作用 ($F(2.82, 360.86) = 6.28, p < .01, \eta^2 = .05$) が有意であった。個人領域衣服条件と個人領域友人条件では有意差はみられず, 個人領域衣服条件と自己管理領域, 個人領域衣服条件と慣習領域, 個人領域友人条件と自己管理領域,

個人領域友人条件と慣習領域、自己管理領域と慣習領域の間に全て 1%水準で有意差がみられた。親の権威を認める程度は、自己管理領域、慣習領域、個人領域の 2 条件の順で高かった。交互作用の単純主効果の検定では、個人領域衣服選択条件 ($F(1, 128) = 4.19, p < .05, \eta^2 = .03$)、個人領域友人選択条件 ($F(1, 128) = 24.74, p < .01, \eta^2 = .16$)、自己管理領域 ($F(1, 128) = 3.95, p < .05, \eta^2 = .03$) において有意差がみられた。個人領域衣服選択条件、個人領域友人選択条件、自己管理領域において、親の権威を認める程度は保護者のほうが中学生よりも高かった。

総じて物語の主効果のほうが交互作用より効果量が高かった。交互作用の中では、個人領域友人選択条件での要求許容性の判断と親の権威の判断における報告者の効果量は他の条件の効果量と比較して高い値を示していた。

考 察

本研究は、日常的な親子葛藤場面を描写した物語を用い、社会的領域理論に基づいた領域が弁別されるとともに、各領域における青年前期の子どもと親の判断の性質の違いを調べた。本研究の参加者が、要求許容性、決定者、親の権威の三つの側面全てで、個人領域、自己管理領域、慣習領域を同じように区別していた結果は、本研究の主要な目的に合致していたと考えられる。

衣服選択場面や友人選択場面では、全体的に個人的理由による正当化が多く、子どもの要求や決定が認められ、最も親の権威が否定されていた。健康管理場面では、自己管理による正当化理由が多く、全体的に親の要求や決定、親の権威が認められていた。手伝いの場面では、慣習的理由が最も多く、中学生は保護者以上に親の要求を認めていた。慣習領域における要求、決定、権威の判断のレベルは、個人領域と自己管理領域の中間であった。以上より、本研究の主要な目的である仮説 (a) と (b) は検証された。中学生と保護者は、衣服や友人の選択ではその他の領域の問題よりも子どもの要求を認め、子どもが決定する事柄であり、親の権威を否定していた。中学生は保護者よりも友人の選択において子どもの要求をより認め親の権威を否定したが、決定者の判断では報告者間に有意な差は認められなかった。よって仮説 (c) は部分的に検証された。一方、保護者は、好ましくない友人とつきあうことにより子どもに危害が及ぶのではないかと自己管理的理由から、友人の選択では子どもにより慎重な判断を行うよう求めていた。よって仮説 (d) は検証された。

回答の傾向性をまとめると、本研究の報告者は、親子間葛藤を評価するにあたり領域を区別した判断を行っており、全ての場面に同じ領域の理由による判断を行う回答はごくわずかであった。保護者は、中学生

よりも多面的な正当化を行う傾向にあった。個人領域では、全般的に子どもの個人的な選択や自律に向けた子どもの要求を認める理由から子ども寄りの判断が行われ、自己管理領域では、総じて子どもを危険性の有る行動から守る親の意図や子どもの健康管理が重要との理由から親寄りの判断が行われた。他方、慣習領域における正当化はさまざまであり一様ではなかった。したがって、個人領域と自己管理領域に関連する問題と比較し、慣習領域の知識が含まれた問題は状況に応じて多面的な解釈が行われることが示唆された。しかし、友人の選択という一部の個人領域の問題において保護者側に自己管理的理由による判断が多くみられたことは、Smetana et al. (2005) の多面的領域の議論と一致していた。自己管理的理由による判断は、衣服の選択においても少なかったがみられた (“露出度の高い服は注意すべきだ” など)。保護者は、子どもの個人領域の問題においても、親子の協調性、文脈、親としての役割をより重視しており、その結果、中学生以上に“両方”や“場合による”という中間的解答や慣習的理由による判断が多くなったと考えられる。

中学生は、個人領域の問題において登場人物の子どもの権利を主張する一方、自己管理の問題では保護者に比べれば親の権威を低く見積もっていたものの保護者と同じぐらい親の要求を認め親が決定するべきと考えていた。また、慣習的問題では、保護者以上に親の要求を考慮していた。自分のアイデンティティに深く関わる個人領域の問題では、より子どもの要求を認め親に従う必要がないと判断していた。本研究の結果は、日本の児童 (Yamada, 2009) や他の文化の青年 (Fuligni et al., 2009; Smetana, 2010; Smetana & Asquith, 1994; Yau & Smetana, 2003) と同じように、日本の中学生が自らの個人領域を尊重し自分のアイデンティティに関連する個人的選択を重視する傾向にあることを示していた。一般的に、子どもが持つ慣習領域や自己管理領域の信念は親からの影響が強いが、個人領域に関する信念は青年前期から中期にかけ親しい友人からの影響が強くなる (Daddis, 2008)。友人選択場面で中学生がより強い親への不服従を示した本研究の結果は、青年前期のアイデンティティ形成における友人の獲得の重要性を示唆していたと考えられる。青年中期後期になると、友人の選択は子どもの自由意思にまかされるようになり、職業選択の問題のほうが親子にとって重要性が増すと考えられる。その場合子どもは友人選択よりも職業選択に関連する親からの介入に強いリアクタンスを感じるようになるかもしれない。しかし、中学生は、どのような親の介入に対してもリアクタンスを感じ自由意思を阻害されていると否定的に捉えていたのではない。親の権威や統制の及ぶ領域に応じて否定的な介入かそうではないか柔軟に判断していた。本研究の結果により、青年前期の子どもは、日常的な意思決

定の場面ごと相手の要求の認識や誰が決定すべきかについて複雑な社会的判断を行い、親の要求を認めそれに従うべきと考える領域と、自分と親の要求は相いれず従わなくても良いと考える個人領域を区別していることが示唆された。

家庭の中には、情緒的な関わりからある種の命令的内容を含んだもので、多様なやり取りが存在する。青年期の親子の相互作用に関連する焦点の一つは、子どもにこうあって欲しいと願う親の要求と、思考や行動の自由を獲得しつつある子どもとの、お互いの要求の調整である (Smetana, 2010)。幼児期や児童期に頻発する親子間の諍いは発達的な問題となるが、青年期における親子の視点や解釈の違いから生じる要求の衝突は、異常というよりむしろ正常の範囲の出来事 (Kerig, Ludlow, & Wenar, 2012) と考えられる。子どもは、成長するに従い、アイデンティティすなわち自分らしさを構築していくとともに親からの自立や独立性を求めるようになる。このような自律への動きは、子どもが単独で獲得する、あるいは、親から一方的に与えられるのではなく、個人領域と他の社会的領域との境界を認識し再構成する子どもとそれを認めあるいは新たな枠組みを与える親との一連の相互作用を通じて促進され獲得されるものである (Nucci, 1996)。領域の境界の認識があいまいでどのような領域も個人領域と考える、あるいは個人領域の範囲が極端に狭い場合、親との衝突が増加するか、葛藤の表出は少ないがアイデンティティ獲得の正常な発達から逸れてしまうと推測される。

先行研究の結果と異なった点について述べる。本研究の親子の判断は、子どもの個人領域の問題なので親の権威を認めないとの回答が大半を占めた Yamada (2009) とは異なり、子どもの意思決定を支持する場合でも個人的理由の他に“親子でよく話し合う”などの協調的な判断理由が多かった。これは、子どもの要求と親の要求を同時に考えられる第三者の視点取得の発達差を示していた可能性が考えられる。その一例として、本研究の中学生の中には、要求許容性の判断では“どちらの気持ちもわかる”と理由を述べながら、決定者の判断では“その人 (子ども) が決めるべき”と回答していたことがあげられる。一方、保護者の正当化では、“子どもの好みや考えはなるべく尊重したいが、場合による”といった回答も多くみられ、子どもの意思決定をどのように認めるのがよいか苦心する様子がうかがえた。このように、親子葛藤に対する判断には、親子それぞれに複雑な心理のプロセスの存在が想定されることから、協調的判断の選択理由について面接調査を用いたより詳しい聞き取りや年齢段階を操作した調査が必要と考えられる。

Yamada (2009) の結果と異なった点はもう一つある。本研究の場合、慣習領域の親子葛藤について、中学生

は保護者以上に子どもより親の要求のほうが許容できると判断していた。慣習の発達段階 (Turiel, 1978) によれば、慣習概念は、慣習について、肯定から否定へというよりも、否定と肯定を弁証的に繰り返しながら、低次から高次の段階へと発達する。本研究の中学生サンプルには、Yamada (2009) の児童とは異なり、慣習を否定する発達段階と肯定する発達段階の生徒が混在していたかもしれない。他の理由として、本研究のサンプルが首都圏ではなく地方都市在住者であったことがあげられる。家族内の援助 (helping) は、友人など遠縁の対人関係に比べてより義務的とみなされる (Killen & Turiel, 1998)。日本の地方都市では、家族内の結束、親子の上下関係、義務の意識も高く、そのことが手伝いのような慣習領域の問題に対する子どもの判断において親の権威の正当性を高めていた可能性がある。

最後に、今後の研究で検討すべき課題について述べる。第一の課題は、本研究がジネット法を用いた質問紙調査であった点である。構造化された質問紙調査の長所は、親子の相互作用場面の観察に比べ互いの存在に左右されず自分の考えを率直に述べることができる点 (Smetana, Braeges, & Yau, 1991) や、面接法に比べ一度に多くのデータが得られる点 (Yamada, 2009) である。しかし、面接では正当化理由があいまいな場合次の質問を行うことでよりの確な回答を得ることができるのに対し、本研究で得られた自由記述の中には文言が短く意味が不明瞭であったため分類作業に苦慮した回答がいくつかみられた。今後は最初に回答理由の選択肢を作成しておくなど改良の余地はあると考えられる。加えて、本研究で使用した物語文の妥当性を追試により確認していくことが必要であると考えられる。第二は、サンプルの代表性についてである。郵送法による回収率が低かったことから比較的協力的で適応の良いサンプルだった可能性がある。また、本研究の参加者は女子とその母親に偏っていたため今後は代表性を高める努力が必要である。しかし、今日、プライバシー保護の観点から、教育現場を通し研究者が親子に対して調査を行うことが益々困難になってきている (神林・片瀬, 2009)。親と子どもの報告両方を用いた分析を行ったことは、研究の妥当性を高めたという意義があると考えられる。第三は、本研究では親と子どもの青年前期における社会的判断を明らかにしたものの、年齢による違いや発達の変化を扱っていない点である。

次の課題は、さまざまな社会的領域の親子間葛藤に対する子どもの認識にどのような発達の変化がみられるか、また、親側の認識に子どもの成長に応じた変化がみられるか横断的縦断的に明らかにすることである。近年、子どもの個人領域に対する親の過剰な介入は青年中期の心理社会的な問題に関連するとの結果が

報告されている (Hasebe, Nucci, & Nucci, 2004)。今後の研究では、個人領域への介入が通常の発達や問題行動にどのようにつながるのか、縦断的な手法による因果関係の検討も必要と考えられる。

引用文献

- Cohen, J. (1960). A coefficient of agreement for nominal scales. *Educational and Psychological Measurement*, **20**, 37-46.
- Daddis, C. (2008). Influence of close friends on the boundaries of adolescent personal authority. *Journal of Research on Adolescence*, **18**, 75-98.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W.W. Norton & Company.
- (エリクソン, E. H. 岩瀬 庸理 (訳) (1973). *アイデンティティ——青年と危機——* 金沢文庫)
- 越中 康治 (2007). 攻撃行動に対する幼児の善悪判断に及ぼす社会的文脈の影響——社会的領域理論の観点から—— *教育心理学研究*, **55**, 219-230.
- (Etchu, K. (2007). Social context and preschoolers' judgements about aggressive behavior: Social domain theory. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **55**, 219-230.)
- Feldman, S. S., Rosenthal, D. A., Mont-Reynaud, R., Leung, K., & Lau, S. (1991). Ain't misbehavin': Adolescent values and family environments as correlates of misconduct in Australia, Hong Kong, and the United States. *Journal of Research on Adolescence*, **1**, 109-134.
- Fleiss, J. L., Cohen, J., & Everitt, B. (1969). Large sample standard errors of kappa and weighted kappa. *Psychological Bulletin*, **72**, 323.
- Fuligni, A. J., Hughes, D. L., & Way, N. (2009). Ethnicity and immigration. In R. M. Lerner & L. Steinberg (Eds.), *Handbook of adolescent psychology*. Vol. 2. Hoboken, NJ: Wiley. pp. 527-569.
- Gelman, S. A. (2004). Psychological essentialism in children. *Trends in Cognitive Sciences*, **8**, 404-409.
- Hasebe, Y., Nucci, L., & Nucci, M. S. (2004). Parental control of the personal domain and adolescent symptoms of psychopathology: A cross-national study in the United States and Japan. *Child Development*, **75**, 815-828.
- 神林 博史・片瀬 一男 (2009). 親子調査における親欠票の原因——仙台高校生調査データを用いた分析—— *社会と調査*, **2**, 20-27.
- (Kanbayashi, H., & Katase, K.)
- Kerig, P. K., Ludlow, A., & Wenar, C. (2012). *Developmental psychopathology: From infancy through adolescence*. 6th ed. Maidenhead: McGraw-Hill Education.
- Killen, M., & Turiel, E. (1998). Adolescents' and young adults' evaluations of helping and sacrificing for others. *Journal of Research on Adolescence*, **8**, 355-375.
- Lagattuta, K. H., Nucci, L., & Bosacki, S. L. (2010). Bridging theory of mind and the personal domain: Children's reasoning about resistance to parental control. *Child Development*, **81**, 616-635.
- Laursen, B., Coy, K. C., & Collins, W. A. (1998). Reconsidering changes in parent-child conflict across adolescence: A meta-analysis. *Child Development*, **69**, 817-832.
- Marshall, S. K., Tilton-Weaver, L. C., & Bosdet, L. (2005). Information management: Considering adolescents' regulation of parental knowledge. *Journal of Adolescence*, **28**, 633-647.
- 松永 あけみ・高橋 充・峯岸 哲夫 (2007). 小・中学生における社会的規範理解の発達 群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, **56**, 313-332.
- (Matsunaga, A., Takahashi, M., & Minegishi, T. (2007). Development of the understand of social norm in children at elementary and junior high school. *Annual report of the Faculty of Education, Gunma University. Cultural Science Series*, **56**, 313-332.)
- Newman, B. M., & Newman, P. R. (2001). Group identity and alienation: Giving the we its due. *Journal of Youth and Adolescence*, **30**, 515-538.
- Nucci, L. (1981). Conceptions of personal issues: A domain distinct from moral or societal concepts. *Child Development*, **52**, 114-121.
- Nucci, L. (1996). Morality and the personal sphere of actions. In E. S. Reed, E. Turiel, & T. Brown (Eds.), *Values and knowledge*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 41-60.
- 首藤 敏元 (1988). 幼児における反社会, 向社会, 慣習の概念 上越教育大学研究紀要 第 1 分冊, 学校教育, 幼児教育, 障害児教育, **7**, 127-145.
- (Shuto, T. (1988). Preschool children's conceptions of antisocial, prosocial, and conventional behaviors. *Bulletin of Joetsu University of Education. Sect. 1, School Education, Early Childhood Education, and Special Education*, **7**, 127-145.)
- 首藤 敏元・岡島 京子 (1986). 子どもの社会的ルール概念 筑波大学心理学研究, **8**, 87-98.
- (Shuto, T., & Okajima, K. (1986). Children's concepts of social rules. *Tsukuba Psychological Research*, **8**, 87-98.)
- Smetana, J. G. (1989). Adolescents' and parents' reasoning about actual family conflict. *Child Development*, **60**, 1052-1067.
- Smetana, J. G. (1991). Adolescents' and mothers' evaluations of justifications for conflicts. *New Directions for Child and Adolescent Development*, **51**, 71-86.
- Smetana, J. G. (2010). *Adolescents, families, and social development: How teens construct their worlds*. NJ: Wiley-Blackwell.
- Smetana, J. G., & Asquith, P. (1994). Adolescents' and parents' conceptions of parental authority and personal autonomy. *Child Development*, **65**, 1147-1162.
- Smetana, J. G., Braeges, J. L., & Yau, J. (1991). Doing what you say and saying what you do: Reasoning about adolescent-parent conflict in interviews and interactions. *Journal of Adolescent Research*, **6**, 276-295.
- Smetana, J. G., Crean, H. F., & Campione-Barr, N. (2005). Adolescents' and parents' changing conceptions of parental authority. *New Directions for Child and Adolescent*

Development, **108**, 31–46.

- Smetana, J. G., & Metzger, A. (2008). Don't ask, don't tell (your mom and dad): Disclosure and nondisclosure in adolescent–parent relationships. In M. Kerr, H. Stattin, & R. C. M. E. Engels (Eds.), *What can parents do? New insights into the role of parents in adolescent problem behavior*. West Sussex: Wiley. pp. 65–87.
- Smetana, J. G., Tasopoulos-Chan, M., Gettman, D. C., Villalobos, M., Campione-Barr, N., & Metzger, A. (2009). Adolescents' and parents' evaluations of helping versus fulfilling personal desires in family situations. *Child Development*, **80**, 280–294.
- Tisak, M. S., & Turiel, E. (1984). Children's conceptions of moral and prudential rules. *Child Development*, **55**,

1030–1039.

- Turiel, E. (1978). The development of concepts of social structure: Social convention. In J. Glick & K. A. Clark-Stewart (Eds.), *The development of social understanding*. New York: Gardner Press. pp. 25–108.
- Yamada, H. (2009). Japanese children's reasoning about conflicts with parents. *Social Development*, **18**, 962–977.
- Yau, J., & Smetana, J. G. (2003). Adolescent-parent conflict in Hong Kong and Shenzhen: A comparison of youth in two cultural contexts. *International Journal of Behavioral Development*, **27**, 201–211.

—— 2014. 5. 18 受稿, 2015. 1. 24 受理 ——

付 録

自由記述の分類に用いたコーディングの定義

カテゴリー	定義
道徳的	
公正さ	その行動や要求が公平か否かにかかわる
他者の福利	他者の健康や安全に損害を与えるような行為や決定, 他者に身体的被害を与える行為であると指摘
道具的互恵性	その行動を行うことが将来の益になることを指摘する / 以前良くしてもらったことに対し相手にも益になるようなことをすべきだと主張
慣習的	
親の権威	親の権威, 知識, 人生経験上の優位を指摘
規則	規則の存在を言及
社会的同調	集団の規範に反した行動の帰結について言及
制裁・罰の回避	罰せられるなど登場人物に対する親や他者からの制裁について言及
責任・役割	社会や家族内における登場人物の役割や責任について言及する / 性役割を含む / 家族の要求を満たす, または家族としての責務を考慮する必要性に言及
自己管理	
自己管理	個人的な健康, 安全, 楽しみや基本的な生活スタイルに関して, 肯定的否定的結末をもたらす行為や決定に言及
実用的	
実用的	実用的, 経済的, 現実的な要求や結果について言及
個人的	
個人的選択	個人の欲求充足, 好みや要望に基づいた行為や判断に言及
自律	個人性 (individuality) の存在や発達に言及する, 自分自身の考えや意志感情を表明する必要がある, あるいは人それぞれが独立して判断行動する必要があることに言及
心理的	
心理的理由	登場人物の心理的特徴, 発達, 感情の成熟におけるその行為の効果に言及する / 登場人物の心理的な発達に関連するような要因に言及
気遣い	他者の感情を害しないようにとの気遣い
協調的	
協調的関係性	他者の要求, 願い, 感情を理解する必要性や, 他者の意志, 立場, 視点を尊重する必要性を言及
対人的関係の維持	友情, 情緒的つながり, 対人関係における効果を言及
その他	
上記以外	いずれのカテゴリーにも該当しなかった反応